青森県埋蔵文化財調査報告書第96集

発茶沢遺跡

発掘調査報告書

昭和60年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第96集

はっ　ちゃ　ざわ

発茶沢遺跡

発掘調査報告書

昭和60年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は、むつ小川原開発事業予定地内の埋蔵文化財の保護と活用を図るため、昭和46年度から分布調査、試掘調査、発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、昭和60年度に実施した、むつ小川原港臨港道路（東西）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の結果をまとめたものであります。

この成果が今後の埋蔵文化財保護と活用に、いささかでも役立てば幸いです。

最後に、この調査に参加された調査員をはじめ、種々、御指導、御協力をいただいた関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

昭和61年３月

青森県教育委員会

教育長　本　間　茂　夫

例　　言

１．本報告書は、昭和60年度に実施した上北郡六ヶ所村に所在する発茶沢遺跡の発掘調査報告書である。

２．本遺跡については、昭和47・48・49・53年度に試掘調査を、昭和54・55年度に本調査を各々実施し、報告書を刊行している。

３．本年度の発掘調査区域は、昭和55年度に発掘調査を実施した際、Ｃ地区と地区割りをした区域の北側に位置している。

４．調査は、昭和55年度の調査区域と今回の調査区域が隣接、連続していることから調査方法、各種の呼称等について、当時に準ずることにした。

５．本報告書の執筆者の氏名は、文末に記した。

６．挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。

目　　次

序

例　言

第Ⅰ章　調査の経過…… 1

第１節　調査に至る経過…… 1

第２節　調 査 要 項…… 1

第３節　調 査 方 法…… 2

第Ⅱ章　遺跡の概観…… 5

第１節　遺跡周辺の地形及び地質…… 5

第２節　遺跡の基本層序…… 7

第Ⅲ章　遺構と遺物…… 9

第１節　遺　　構…… 9

第２節　遺　　物…… 14

ま と め…… 20

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置…… 3
第２図　調査区域及び周辺の地形…… 4
第３図　遺跡周辺の地形分類図…… 6
第４図　遺跡における土層の模式柱状図…… 8
第５図　グリット・遺構配置図…… 9
第６図　溝状ピット実測図（１）…… 11
第７図　溝状ピット実測図（２）…… 12
第８図　溝状ピット規模・長軸方向・ピット配列図…… 13
第９図　円形ピット・焼土状遺構…… 14
第10図　土器拓影図…… 17
第11図　石器実測図…… 18
第12図　古銭拓影図…… 19
第13図　発茶沢遺跡における火山灰のRb-Sr分布図…… 20

表　目　次

第１表　溝状ピット計測表…… 9
第２表　石器計測表…… 16
第３表　古銭計測表…… 16

写真図版目次

ＰＬ１　遺跡全景・土層…… 22
ＰＬ２　溝状ピット…… 23
ＰＬ３　溝状・円形ピット・焼土状遺構…… 24
ＰＬ４　出土遺物（土器・石器）…… 25
ＰＬ５　出土遺物（古銭）…… 26

第Ⅰ章　調 査 の 経 過

第１節　調査に至る経過

六ヶ所村の尾駮沼に沿った丘陵上には、多くの遺跡が所在している。この度、この丘陵上でむつ小川原港臨港道路（東西）整備が行われることになったので、当該事業の路線内に所在する遺跡の有無について調査の依頼があった。

県教育委員会では、この依頼を受けて計画路線を調査したところ、当該路線内に、発茶沢遺跡が所在していることを確認した。

そこで、この遺跡の保護について両者で協議したところ、路線を変更することは不可能であることから、事前に発掘調査を実施して記録保存することで協議が整った。

昭和60年４月15日、六ヶ所村中央公民館で発茶沢遺跡の保護、調査の方法などについて、関係者による打合せ会が開催され、調査は、４月15日から開始された。

（新谷）

第２節　調 査 要 項

１．調査目的

むつ小川原港臨港道路（東西）整備事業に先立ち、同事業予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その記録保有をはかるものである。

２．調査期間

昭和60年４月15日から同年６月30日まで

３．遺跡名及び所在地

発茶沢遺跡

青森県上北郡六ヶ所村大字鷹架字発茶沢２－32他

４．調査対象面積

3,200㎡

５．調査委託者

青森県土木部港湾課

６．調査受託者

青森県教育委員会

７．調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

８．調査協力機関

六ヶ所村教育委員会　　上北教育事務所

９．調査参加者

調査指導員	村越　　潔	弘前大学教授
調査協力員	田中　　澄	六ヶ所村教育委員会教育長
調　査　員	小山　陽造	八戸工業高等専門学校教授
	滝沢　幸長	八戸市文化財保護審議会委員
	佐藤　　巧	県立郷土館学芸員
	山口　義伸	県立木造高等学校稲垣分校教諭

青森県埋蔵文化財調査センター

所　　長	三橋　時男	調査補助員	佐々木新治（昭和60年９月退職）
次　　長	須藤　昭二		船橋　英樹
総務課長	館浦　善清		鶴谷しげ子（昭和60年10月退職）
調査第一課長	新谷　　武		昆　　明子
主　　査	遠藤　正夫		長谷部明美
主　　事	一条　秀雄		

第３節　調 査 方 法

１．調査区の設定

調査区域は、昭和55年度に発掘調査を実施した区域（発茶沢遺跡Ｃ地区）の北側に位置している。なお、調査は、昭和55年度の調査時における方法に準拠した。

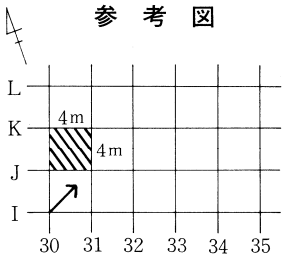
グリッドを設定するにあたっては、当時のグリッド設定の基準とした道路建設用中心杭を今回も利用した。

従って、グリッドの呼称、大きさは、昭和55年度調査時の場合と同じで、参考図に示したとおり、１グリッドの大きさは、４ｍ×４ｍで、呼称は、グリッドライン交点のうち南西隅の交点の杭の名称を使用することにした。

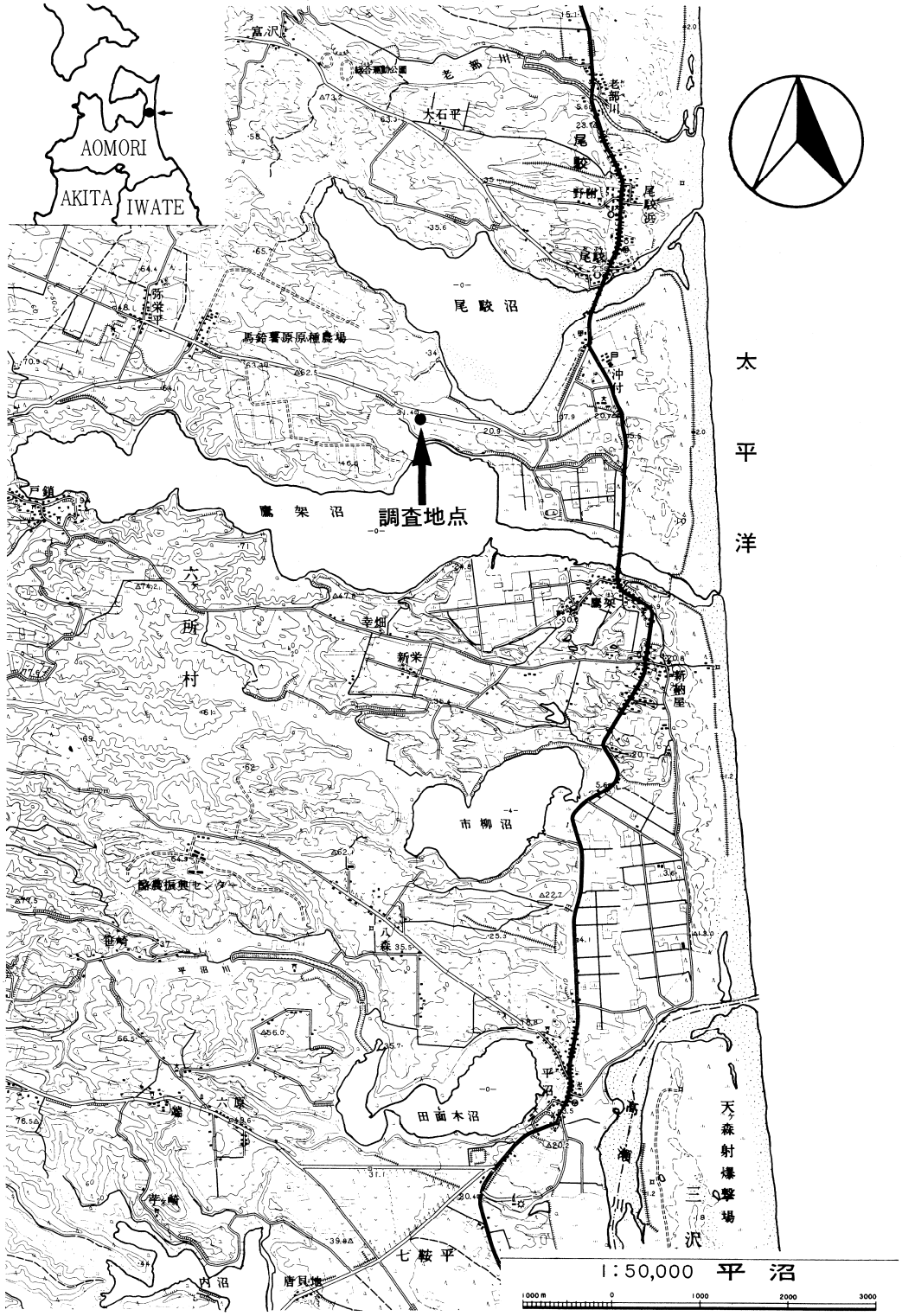
グリッド基準線からみた調査区域の範囲は、およそ、南北方向が、ＩラインからＲラインまでで、東西方向が25ラインから63ラインまでである。

南北方向のグリッド基準線は、正確に言えば、磁北から東に54度ずれている。

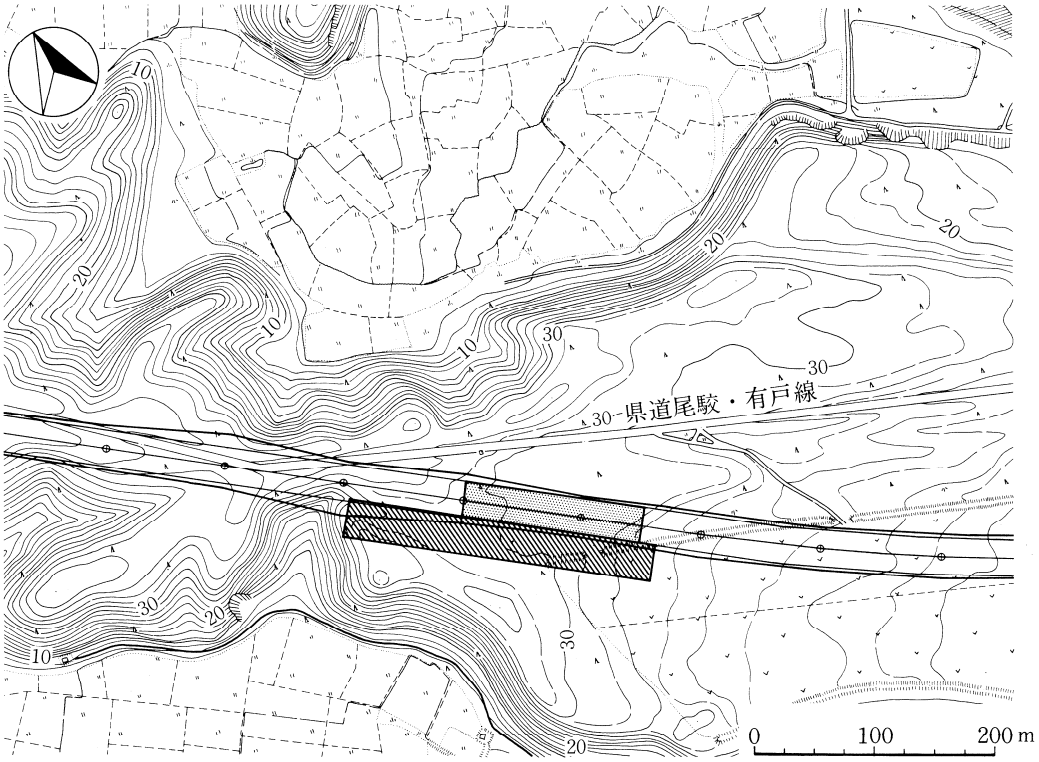
参　考　図



（Ｊ－30）グリッド


AOMORI
AKITA
IWATE
太平洋
調査地点
尾駮沼
鷹架沼
市柳沼
田面木沼
平沼
六所村
1:50,000
平沼
1000m
0
1000
2000
3000

第1図　遺跡の位置



第２図　調査区域及び周辺の地形　▒▒—調　査　区　域　▨—昭和55年度調査区域

２．調査方法

土層の堆積状況を把握するため、適宜、セクションベルトを設け、グリッド単位で粗掘りを進めていくことにした。

遺物は、層位ごと・グリッドごとに取り上げることにし、必要に応じて平面図の作成、写真撮影を行なうことにした。

遺構は、四分法で精査することを原則とし、縮尺1/20で実測図を作成し適宜写真撮影を行うことにした。

土層の呼称については、標準土層は表土から下位に向ってアラビア数字を、遺構内堆積土にもやはり、上位から下位に向って算用数字を各々付すことにした。

写真撮影は、適宜撮影することにし、その際はカラースライドとモノクロの２種類のフィルムを使用することにした。

（遠藤）

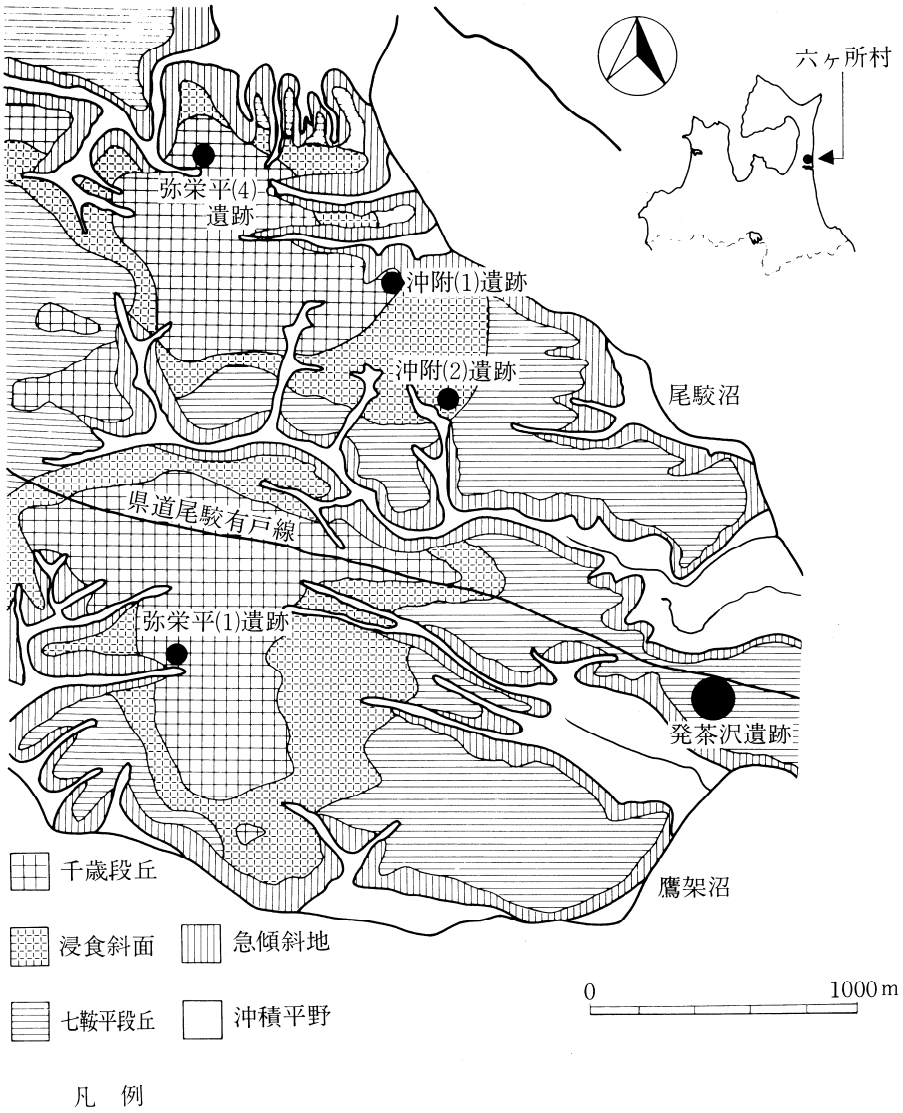
第Ⅱ章　遺 跡 の 概 観

第１節　遺跡周辺の地形及び地質

上北郡六ヶ所村は下北半島頸部の太平洋側にあって、この付近には北方から、尾駮沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼群がみられる。太平洋岸にはこれらの湖沼を閉塞するような形で、天ヶ森砂丘が現汀線に沿ってほぼ南北方向に約200ｍの幅で分布し、さらに内陸側には標高が約５～23ｍにも及ぶ古砂丘が同じく南北方向に約200～300ｍ、尾駮沼と鷹架沼との間では約800ｍの幅で分布している。現在、古砂丘は松林となっていて、防風・防砂林の役割を果している。また、この付近には海岸段丘の発達も顕著であって、上位から、吹越烏帽子段丘（標高100～140ｍ）、長者久保段丘（標高90～130ｍ）、千歳段丘（標高60～100ｍ）、七鞍平段丘（標高12～50ｍ）の４段丘が確認できる。これらの段丘のうち、本遺跡が立地しているのは最下位の七鞍平段丘である。この七鞍平段丘は現汀線にほぼ平行に約４㎞の幅で発達しているが、湖沼群の存在で断続的になっている。全般的に開析度が小さく、起伏の少ない平坦な地形である。

本遺跡の立地する地域では、北に尾駮沼、南に鷹架沼があり、両沼にはさまれて、300～600ｍの幅で東方に２㎞ほど舌状に張り出すような形で七鞍平段丘が発達している。この舌状に張り出した本段丘は、本遺跡の西方約100ｍ地点で、東流して両沼に注ぐ各々の浸食谷の浸食作用により南北の幅が50ｍもないほど狭小であり、全体的には標高が12～30ｍで比較的平坦な地形である。本遺跡が立地する付近では標高が約30ｍであって、県道尾駮―有戸線に沿って比高１ｍ弱の谷状凹地があり、本遺跡に達している。このため遺跡内の中央部は湿地状になっていて湧水がひどい。なお、尾駮沼、鷹架沼へは約30ｍの急峻な段丘崖でもって接している。（第３図）

下北半島の頸部を構成している地層のうち、基盤をなす地層は新第三系中新紘の泊安山岩類及び鷹架層である。また、本地域に最も広く分布する地層は新第三系鮮新紘の浜田層及び第四系下部洪積紘の野辺地層である。新第三系中新紘の泊安山岩類は安山岩質角礫岩及び同質集塊岩からなっていて、本遺跡北方の老部川に臨む段丘崖にみられるが、主に本地域北方の山岳地に広く分布している。中新紘の鷹架層は主として塊状のシルト質砂岩からなり、泊安山岩類の上部と指交関係にあって鷹架沼を中心にほぼ南北に分布している。新第三系鮮新紘の浜田層は塊状無層理の砂質シルト岩と砂岩との互層からなり、下位の中新紘を不整合におおっていて、本地域に広く分布している。また、第四系下部洪積紘の野辺地層は全体的に砂とシルトの互層からなり、下位の新第三系を不整合におおい、ほぼ水平に堆積していて、一般に段丘構成層に



第３図　遺跡周辺の地形分類図

おおわれている。

七鞍平段丘の段丘構成層は、主に中～粗粒砂層で、時に薄層あるいはレンズ状の礫層を伴うことがある。火山灰層について本遺跡周辺で典型的に分布するのは上北上部火山灰層基底部に伴う千曳浮石（Ｃｂ・Ｐ）に相当する黄褐色ラピリ質浮石のみであって、本浮石層より下位には時として粘土質火山灰が分布することがある。しかし、本遺跡における模式柱状図を第４図に示したが、遺跡内には千曳浮石相当層は分布していない。

第２節　遺跡の基本層序

本遺跡における各層の概要は次のとおりである。本遺跡に南接する、昭和55年度発掘の発茶沢遺跡Ｃ地区及び、約750ｍ東方のＢ地区の土層区分と対比してあるが、両地区は平坦地であるのに対し、本遺跡は中央部に湿地をもつ、多少起伏に富む地形であるため層相の変化がみられる。

Ⅰ層　灰黒色土層（10～15㎝）　表土。草根を多量に含んでいて、全体的にしまりがなくソフトな感じがする。

Ⅱ層　黒色腐植質土層（５～20㎝）　上位のⅠ層と合わせて発茶沢遺跡Ｂ・Ｃ地区のⅠ層に対比される。草根を含み、硬さがあってもろい感じがする。乾くと、ラフな縦割れが発達してⅠ層と区分できる。本層は凹部で20㎝ほどの厚さをもち、凸部では薄くなり、時にレンズ状になったりする。

Ⅲ層　灰褐色細粒火山灰層（５㎝）　本遺跡中央部の湿地内の黒色土層の厚く堆積しているところにのみ分布している。この火山灰の特徴は、発茶沢遺跡Ｂ地区の第16号竪穴住居跡周辺にて確認された上下２枚の降下火山灰のうち、上位の苫小牧火山灰層に相当するものと考えられる。

Ⅳ層　黒色腐植質土層（20～30㎝）　本遺跡中央部の湿地内においては、Ⅳａ層及びⅣｂ層に２分できる。上部のⅣａ層は、硬さがあり、もろい感じがする。乾くと格子状の割れ目が発達し、革上部にクラック（crack）がみられる。下部のⅣｂ層はⅣａ層より一層粘土質であり、湿性も充分であって表面はなめらかである。Ⅳｂ層は湿地内に特徴的に分布している。

なお、Ⅳ層全体として凸部においては、土壌化の進行した黒褐色土層に変化することから、発茶沢遺跡Ｂ・Ｃ地区のⅢ層に対比されるものと考える。この両地区のⅡ層に対比される層は、本遺跡の凸部にはなく、湿地内でのⅣａ層に相当するものと考える。

Ⅴ層　暗褐色火山灰質土層（20㎝）　発茶沢遺跡Ｂ・Ｃ地区のⅣ層に対比される。下位層の風化浸食による風成堆積物で、凸部におけるⅣ層ほど土壌化は進行していない。本層は土壌化の進行程度によりⅤａ層及びⅤｂ層に２分でき、上部のⅤａ層はⅤｂ層よりも多少なりとも土壌化が進行している。

Ⅵ層　褐色粘土質火山灰層（50㎝）　硬くてしまりのある粘土質火山灰である。最上部にクラックの発達がみられる発茶沢遺跡Ｂ・Ｃ地区においては、本

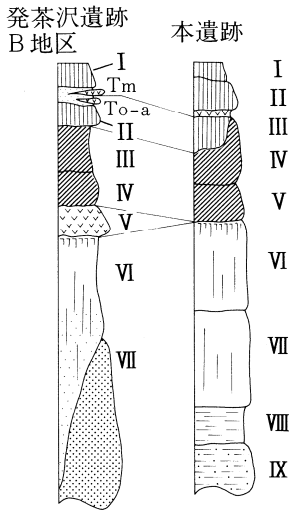
層直上に千曳浮石相当層のラピリ質浮石が位置しているのだが、本遺跡においては欠如している。

Ⅶ層　黄褐色粘土質火山灰層（50cm）　上位のⅥ層より一層粘土質である。

Ⅷ層　灰褐色火山灰質粘土層（20cm）　Ⅷ層と下位のⅨ層は火山灰の水中堆積物と考えられる。

Ⅸ層　黄褐色細粒砂質粘土層（30cm＋）

（山口）

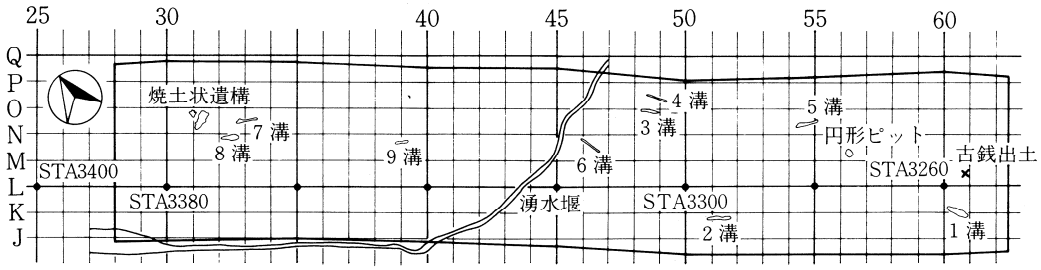


第４図　遺跡における土層の模式柱状図

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　遺　　構

調査の結果、検出した遺構は、溝状ピット９基、円形ピット１基、焼土状遺構１基の総計11基であった。



第５図　グリッド・遺構配置図　0　20m

※太線枠内…調査区域
１溝…第１号溝状ピットの略

（１）　溝状ピット

９基検出したが、うち３基は、湧水により底面まで完掘できなかった。

９基の検出位置、計測値等は第１表に示してある。

第１表　溝状ピット一覧表

ピット番号	検出グリッド	長軸 上 中 下 短軸 上 中 下	深さ	長軸方向	出土遺物	備考
1	J・K—60	369 350 367 93 55 14	123	N—34°—W	なし	
2	J—50・51	378 385 413 45 20 8	100	N—54°—W	なし	
3	N—48	276 283 40 24	65	N—48°—W	なし	
4	O—48・49	353 (　)(　) 23 (　)(　)	(30)	N—35°—W	なし	湧水により完掘できず
5	N—54	382 368 44 15	55	N—67°—W	なし	
6	M—46	323 (　)(　) 14 (　)(　)	(35)	N—23°—W	なし	湧水により完掘できず
7	N—32・33	338 (　)(　) 24 (　)(　)	(25)	N—61°—W	なし	湧水により完掘できず
8	M—32	244 232 246 62 34 14	72	N—63°—W	なし	
9	M—38・39	190 196 32 28 20	43	N—57°—W	なし	

長さ・深さ単位 cm　（　）計測不能又は現存値

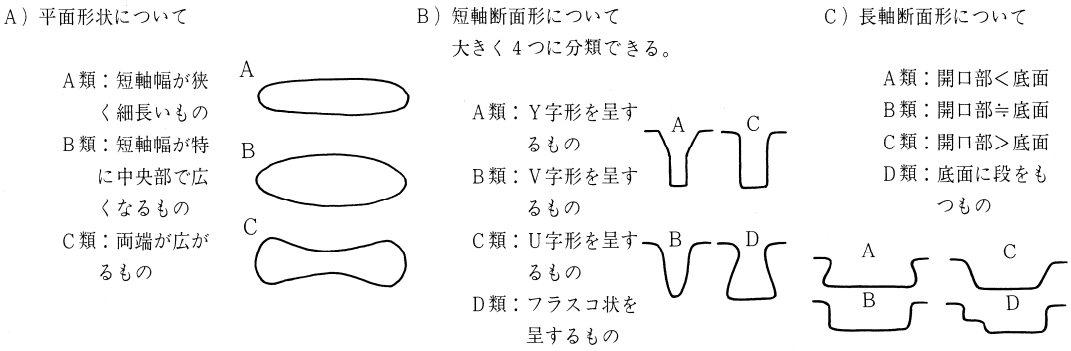
（規　　模）

総数が９基だけであるため統計的視点からの分類及び考察には無理が生じるが、しいて９基のみでみると、規模についての規則性は認められず個々ばらばらの作りである。

（形　　態）

形態については、昭和56年度刊行の「発茶沢遺跡発掘調査報告書」に記載してある分類基準を踏襲して考えてみたい。上記の報告書では次のような形態分類を行っている。

参考図　溝状ピットの形態分類（発茶沢遺跡発掘調査報告書より転載）



上記分類に従って９基を検討してみると、平面形においては、Ｂ・Ｃ類がみられず、かわりに新たな形態がみられる。それは、第４・６・７号の３基にみられる形態で、Ａ類を更に細くした棒状のものである。仮にこの形態をＤ類とすると９基は、Ａ類とＤ類の２種類だけとなる。

長軸断面形においては、Ｄ類がなくＡ・Ｂ・Ｃ類の３種類がみられる。なお、第４・６・７号は、Ａ類の形態をとるものと推定できる。

短軸断面形においては、Ｄ類がなくＡ・Ｂ・Ｃ類の３種類がみられる。

第８・９号については、平面形がＡ類に近い形態を呈しているものの、不整形にも近い形態を呈していることや、規模の面から考えても、構築時に途中で放棄した可能性がある遺構ではないかと推測している。

（覆　　土）

９基のうち、３基が湧水により完掘できず覆土断面を十分観察することができなかったが、９基すべてが自然堆積の様相を呈している。

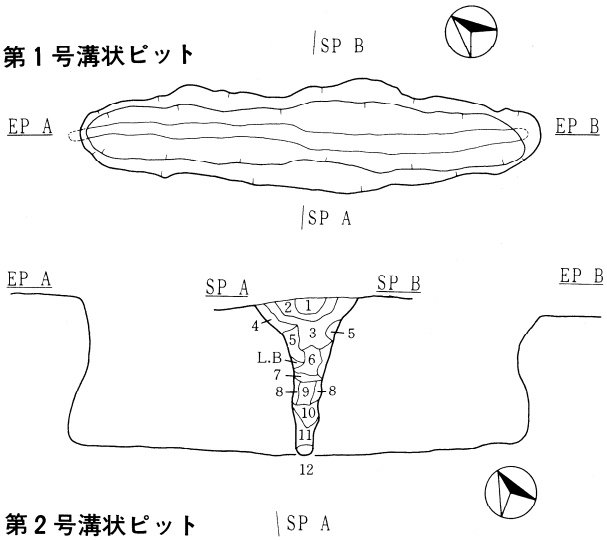
（配　　列）

９基相互の規則性は認められないが、個々については、等高線にほぼ平行に長軸方向が合致している。

（出土遺物）

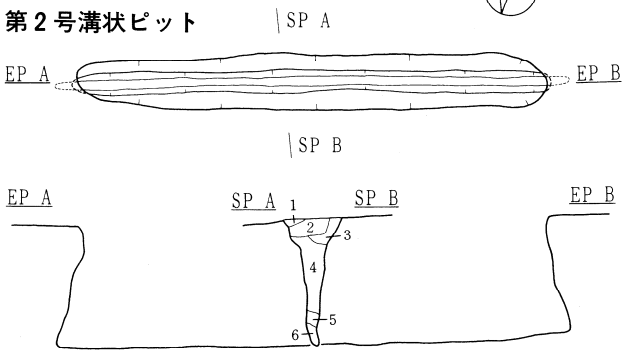
９基すべてにおいて遺物は出土しなかった。

第１号溝状ピット



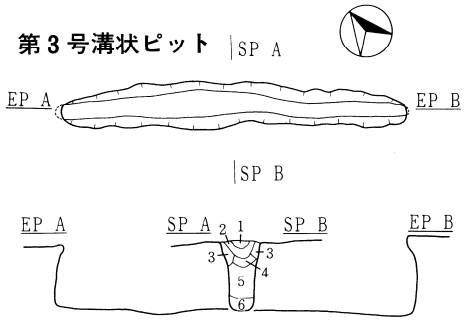
第１号溝状ピット			
第１層	10Y R1.7/1	黒　色	シルト質
2	10Y R 2/2	黒　色	シルト質
3	10Y R 3/1	黒褐色	シルト質
4	10Y R 4/6	褐　色	ローム質
5	10Y R 3/2	黒褐色	シルト質
6	10Y R 3/2	黒褐色	シルト質
7	10Y R 5/3	黄褐色	ローム質
8	10Y R 4/4	褐　色	シルト質
9	10Y R 3/3	暗褐色	シルト質
10	10Y R 5/8	黄褐色	ローム質
11	10Y R 3/3	暗褐色	シルト質
12	10Y R 3/2	黒褐色	シルト質

第２号溝状ピット



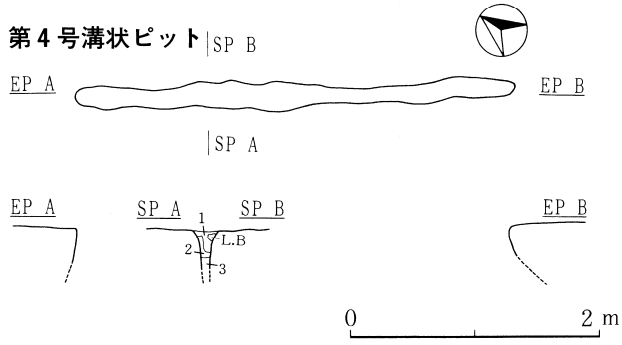
第２号溝状ピット			
第１層	10Y R 3/4	暗褐色	
2	10Y R 2/3	黒褐色	
3	10Y R 4/3	にぶい黄褐色	
4	10Y R 5/8 10Y R 2/3	黄褐色 黒褐色	斑状に混合
5	10Y R 4/4	褐　色	
6	10Y R 2/2	黒褐色	

第３号溝状ピット



第３号溝状ピット			
第１層	10Y R 2/1	黒　色	シルト質
2	10Y R 2/1	黒　色	シルト質
3	10Y R 2/2	黒褐色	
4	10Y R 3/1	黒褐色	
5	10Y R 3/1	黒褐色	
6	10Y R 3/2 10Y R 5/8	黒褐色 黄褐色	混合層

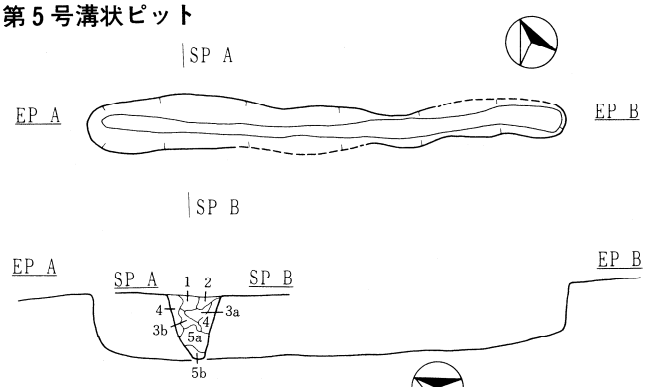
第４号溝状ピット



第４号溝状ピット			
第１層	10Y R1.7/1	黒　色	シルト質
2	10Y R 2/2	黒褐色	シルト質
3	10Y R 2/1	黒　色	シルト質

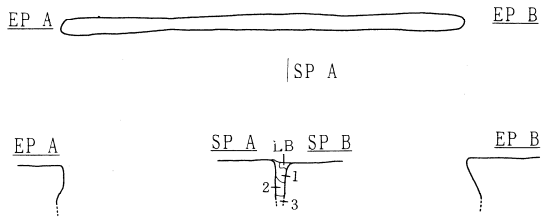
第６図　溝状ピット実測図(1)

第５号溝状ピット



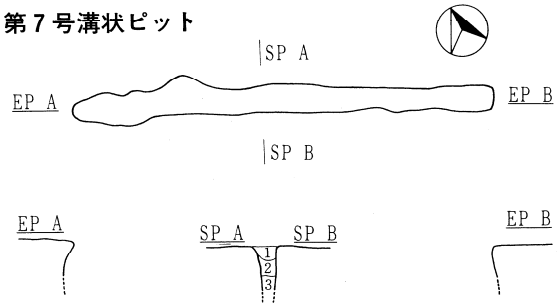
第５号溝状ピット			
第１層	10ＹＲ４/６	褐　色	シルト質
2	10ＹＲ３/４	暗褐色	シルト質
3ａ	10ＹＲ４/６	褐　色	シルト質
3ｂ	10ＹＲ４/６	褐　色	シルト質
4	10ＹＲ６/８	明黄褐色	ローム質
5ａ	10ＹＲ５/６	黄褐色	シルト質
5ｂ	10ＹＲ５/６	黄褐色	ローム質

第６号溝状ピット



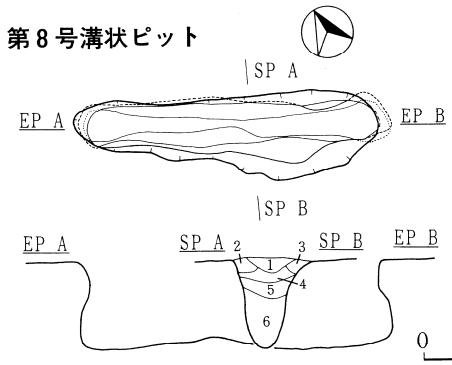
第６号溝状ピット			
第１層	10ＹＰ２/３	黒褐色	
2	10ＹＲ２/３	黒褐色	
3	10ＹＲ２/３	黒褐色	

第７号溝状ピット



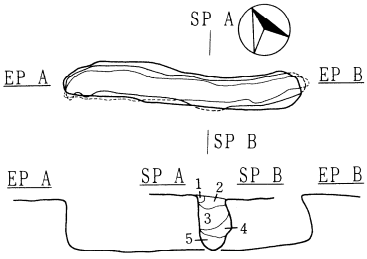
第７号溝状ピット			
第１層	10ＹＲ２/１	黒　色	
2	10ＹＲ３/１	黒褐色	
3	10ＹＲ２/２	黒褐色	

第８号溝状ピット



第８号溝状ピット			
第１層	10ＹＲ1.7/１	黒　色	
2	7.5Ｙ Ｒ ３/１	黒褐色	
3	10ＹＲ２/２	黒褐色	
4	10ＹＲ３/１	黒褐色	
5	2.5Ｙ３/１	黒褐色	
6	2.5Ｙ３/１	黒褐色	

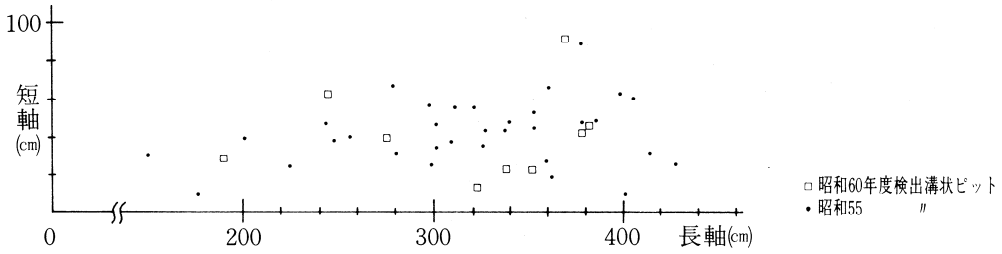
第９号溝状ピット



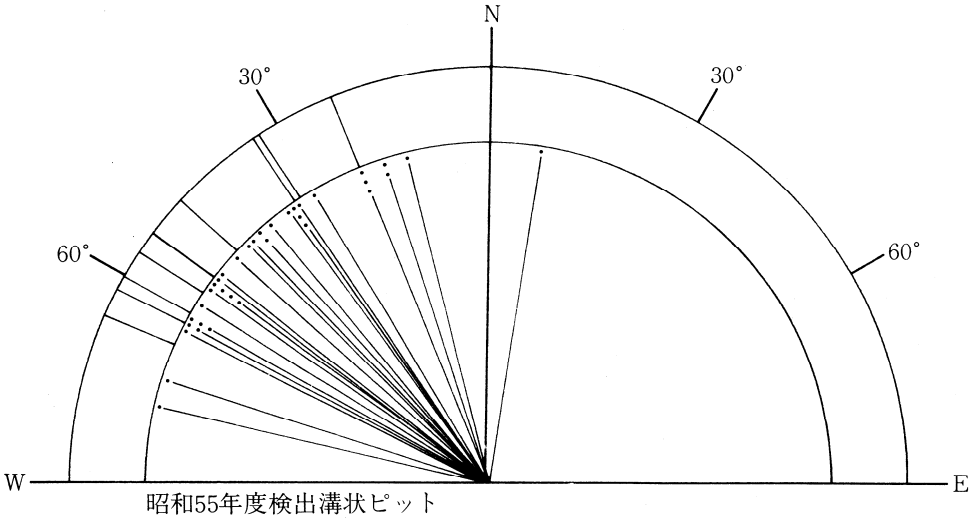
0　　2 m

第９号溝状ピット			
第１層	10ＹＲ２/２	黒褐色	シルト質
2	10ＹＲ２/１	黒　色	シルト質
3	10ＹＲ２/１	黒　色	シルト質
4	10ＹＲ２/１	黒　色	シルト質
5	10ＹＲ２/２	黒褐色	シルト質

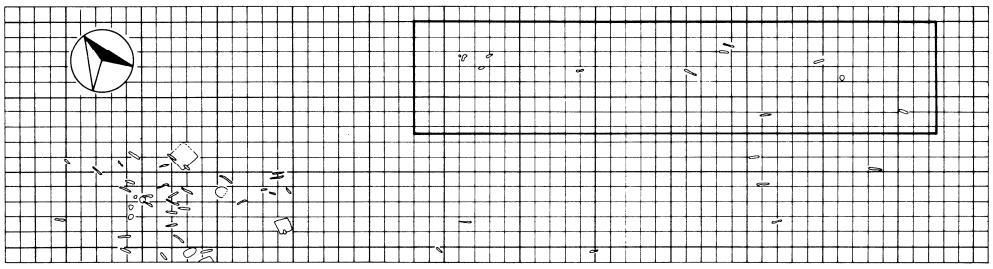
第７図　溝状ピット実測図(2)



〈長・短軸相関図〉



〈長軸方向〉



〈配置関係〉 (太枠線内が調査区域)

第8図　溝状ピット規模・長軸方向・ピット配列図

（２）　円形ピット

円形ピットは１基のみの検出であり、位置は、（M－56）グリッドである。

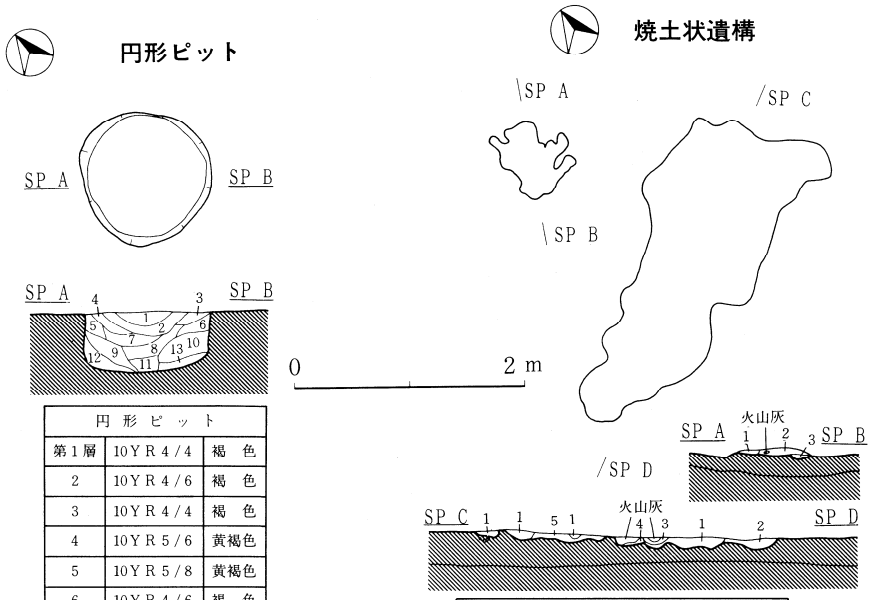
開口部の直径は約110㎝で壙底部の直径が約103㎝のほぼ円筒状の形状を呈している。深さは、平均50㎝である。覆土は、自然堆積の様相を呈している。遺物は出土しなかった。

（３）　焼土状遺構

円形ピットと同様、１基のみ検出した。位置は、（N－30・31）グリッドである。

焼土の範囲は、大小２ヶ所に分かれており、規模は、大きい方が長径約300㎝、短径約100㎝で、小さい方が約70㎝四方である。

大小ともに遺構上面は、焼けて堅くしまっており、焼土の厚さは、平均10㎝である。
遺物は出土しなかった。　（遠藤）



円形ピット		
第１層	10ＹＲ４/４	褐　色
2	10ＹＲ４/６	褐　色
3	10ＹＲ４/４	褐　色
4	10ＹＲ５/６	黄褐色
5	10ＹＲ５/８	黄褐色
6	10ＹＲ４/６	褐　色
7	10ＹＲ４/６	褐　色
8	10ＹＲ４/６	褐　色
9	10ＹＲ５/８	黄褐色
10	10ＹＲ５/６	黄褐色
11	10ＹＲ４/６	褐　色
12	10ＹＲ５/６	黄褐色
13	10ＹＲ５/６	黄褐色

焼土状遺構			
第１層	7.5ＹＲ３/３	暗褐色	
2	7.5ＹＲ３/１	黒褐色	
3	7.5ＹＲ２/２	黒褐色	
第１層	５ＹＲ４/６	赤褐色	
2	５ＹＲ２/３	極暗赤褐色	
3	7.5ＹＲ４/４	暗褐色	
4	7.5ＹＲ２/２	黒褐色	Ⅳ層と火山灰の混合

第９図　円形ピット・焼土状遺構実測図

第２節　遺　　物

１．土器（第10図１～23）

縄文時代早・後期の土器、型式不明の縄文式土器、平安時代の土師器が出土した。

（１）は、底部のみのため口縁部形状は不明だが、変化の少ない尖底深鉢形を呈する。器面には貝殻条痕が施されているが、器面が粗れているためあまりはっきりしない。内面は、やや凹凸して、面が粗れている。胎土には、多量の砂粒、少量の沼鉄、白色凝灰岩粒を含み、繊維の混入も少量認められる。色調は、くすんだ暗褐色を呈し、器厚は７～12㎜である。

（２～６）は、同一個体の破片で尖底深鉢形を呈すると思われる。器面には貝殻条痕が施され、施文部位は明確ではないが、（６）のように刺突列が施されるものもみられる。胎土には、砂粒、沼鉄を含み、やや多めの繊維の混入が認められる。繊維の走向は明瞭に観察し得る。色調は、赤褐色を呈し、器厚は10㎜ほどである。

（７）は、地文に貝殻条痕を施した後に、刺突を斜位、横位に施している。胎土には、砂粒、少量の繊維を含む。色調は黒褐色を呈し、器厚は、９㎜ほどである。

以上の土器は、器形、文様、胎土から縄文時代早期に属すると思われる。（７）の文様は、蛍沢遺跡出土の蛍沢ＡⅡ式の中に見られるが、所属型式の特定はさけたい。

（８～13）は、復原し得なかったがすべて同一個体の破片で、平縁の深鉢形土器と思われる。口縁部は、直立し、口唇部はやや丸みをおびる。器面には、節のあまり明瞭でない単節斜縄文（ＲＬ）が施される。本土器の特徴は、地文の斜縄文の上に地文の縄文原体とは異なる縄文原体を使用した撚糸圧痕文が所々に施されることである。胎土には、砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。器厚は、７㎜ほどである。後期初頭の土器と思われる。

（15～19）、ＲＬ及びＬＲの単節斜縄文が施されるが、縄文時代のどの時期に属するかは不明である。

（20～23）は、平安時代の土師器片で、すべて窯の破片である。

２．石　　器　（第11図１～５）

石器は、磨製石斧２点、石皿１点、磨石１点、凹石１点が出土した。

（２）は、擦切磨製石斧で刃部がやや斜めに傾いており、刃部の断面形状は片刃に近い。表面右側縁近くに縦方向の擦り切り痕が見られ、２方向の擦り面が観察できる。この擦り切り痕は、石斧製作において途中で断念したものと思われる。側縁の擦り切痕は、研磨によって失なわれ観察し得ない。刃部の使用痕は明瞭ではないが、片刃に近い形状から横斧として使用された可能性がある。

（３）は、全面を研磨した磨製石斧であり刃部は破損してない。表面には凹んでいる部分が２箇所見られるが、これは石斧製作時の粗割りの痕と思われ、完全に研磨されずに残っている。側縁には、面取りをしようとした痕跡があるが完全ではない。裏面には、石斧製作時の成形のための潰しの痕跡も認められる。

（4）は、肉厚な自然礫を用いた石皿で２分の１ほどを欠損している。平坦面に磨耗した面が見られ皿状に凹んでいる。

（1）は、断面形状が三角形に近いずんぐりとした自然礫の１つの稜を、機能面とした磨石である。機能面は、かなり、つるつるしている。約３分の１ほどを欠損している。

（5）は凹石で、片面に１個の凹孔が見られ敲打によって形成されたと思われる。凹孔の中は潰れた様相を示している。

３．古　　銭　（第12図１～27）

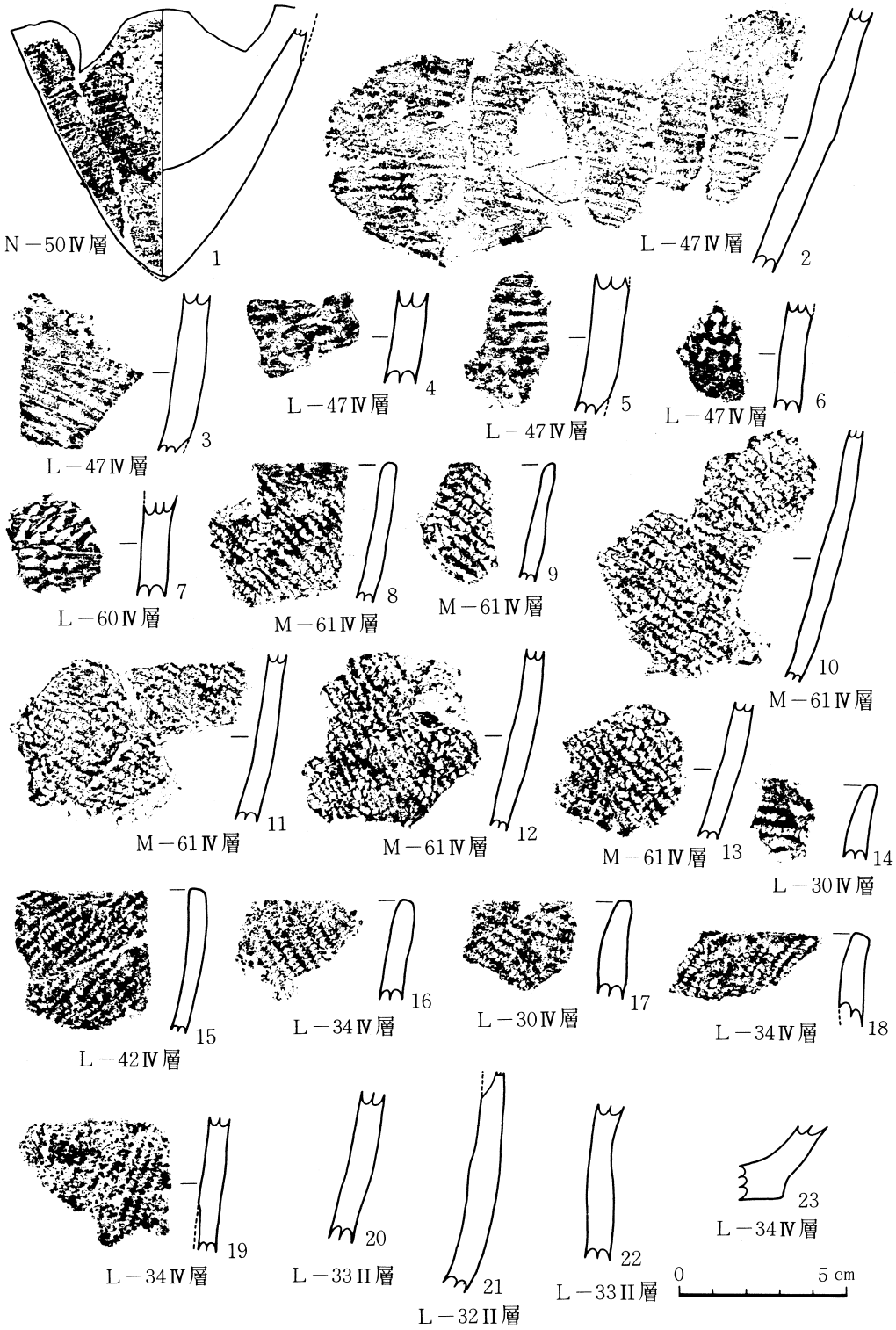
（L－60・61）グリッドの第Ⅰ層より27枚出土した。その内訳は銭貨名不明の鉄銭１枚と江戸時代の寛永通賓26枚である。寛永通賓は全て銅銭である。背文のあるものがあり、「文」が３枚（７、12、19)、「元」が３枚（９、13、26）である。27枚まとまって出土しているが、意図的に廃棄されたものかどうかは不明である。個々の計測値は、第３表に示した。　　（一条）

第２表　石器計測表

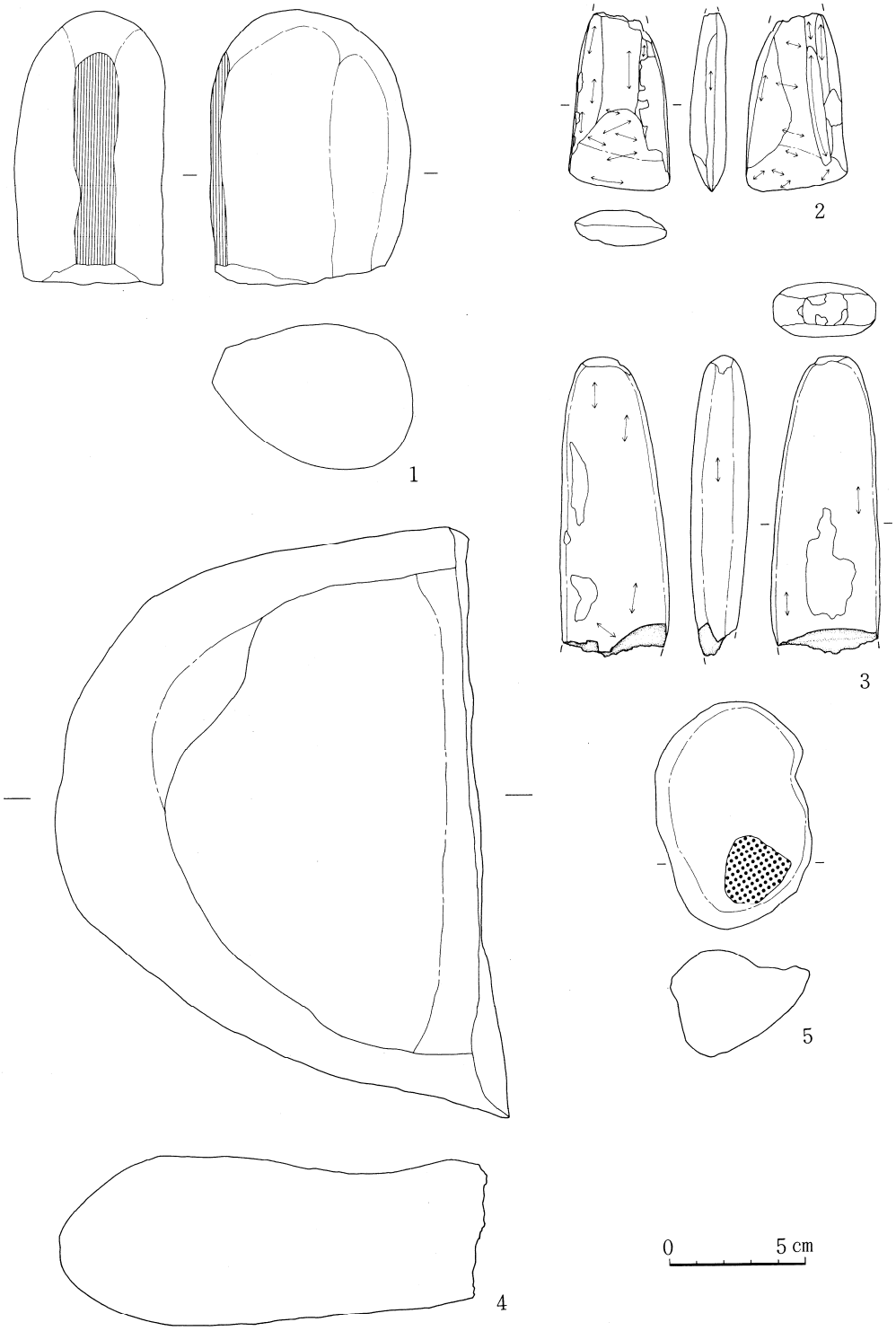
No.	グリッド	分　類	層　位	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量g	石　　質
1	M—47	磨　石	Ⅳ	102	72	53	716	安　山　岩
2	N—46	磨　斧	〃	63.5	37	13	46	輝縁凝灰岩
3	K—59	〃	〃	111	38	21	149	〃
4	O—48	石　皿	〃	155	221	62	2,800	安　山　岩
5	J—51	凹　石	〃	84	61	41	218	〃

第３表　古銭観察表　　※（27）は拓影・写真なし

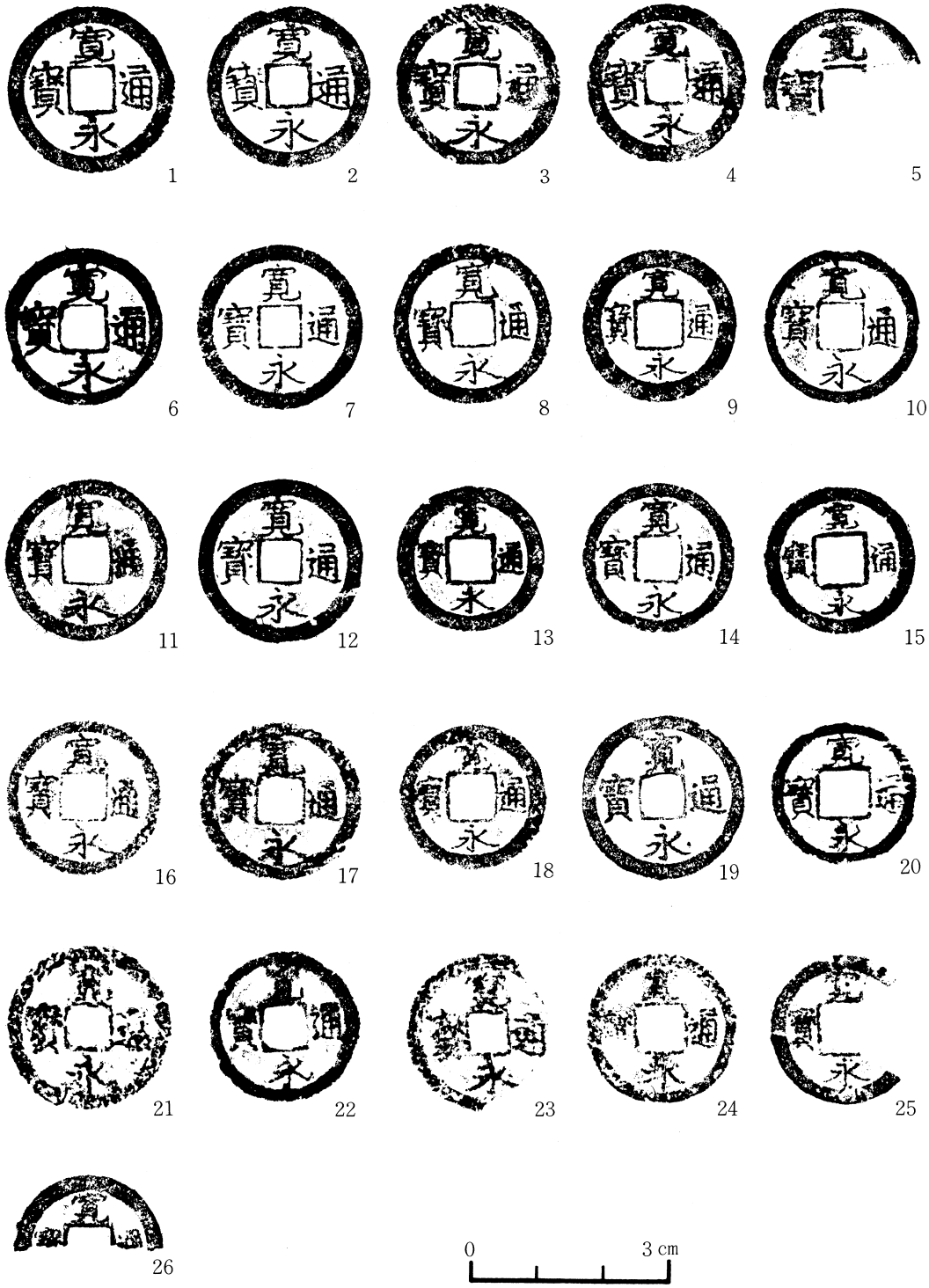
No.	銭　　名	グリッド	層位	直　径	外輪厚	外輪幅	重　さ	備　　考
1	寛永通宝	L—60	Ⅰ	2.5mm	1.2mm	2.9mm	2.85g	
2	〃	〃	〃	24.9	1.1	2.7	2.55	
3	〃	〃	〃	25.2	1.3	2.9	3.35	
4	〃	L—61	〃	24.3	1.0	2.8	2.45	
5	〃	〃	〃		1.0	2.1	1.15	一部破損
6	〃	〃	〃	24.4	1.2	2.6	2.65	
7	〃	L—60	〃	25.1	1.3	2.8	2.9	背文（文）
8	〃	L—61	〃	24.3	1.1	2.6	1.85	
9	〃	L—60	〃	23.4	1.1	3.1	1.85	背文（元）
10	〃	L—61	〃	23.7	1.0	2.0	2.4	
11	〃	L—60	〃	24.5	1.2	2.4	3.05	
12	〃	L—61	〃	25.3	1.4	2.7	2.75	背文（文）
13	〃	〃	〃	22.7	1.0	2.6	1.7	背文（元）
14	〃	L—60	〃	23.3	1.0	2.2	1.95	
15	〃	L—61	〃	23.1	1.1	2.4	2.15	
16	〃	L—60	〃	23.6	1.1	2.1	1.85	
17	〃	L—61	〃	24.7	1.2	2.7	2.6	
18	〃	L—60	〃	22.4	1.0	2.3	1.8	
19	〃	〃	〃	25.5	1.1	2.8	2.9	背文（文）
20	〃	L—61	〃	22.2	1.2	1.8	1.95	
21	〃	〃	〃	24.8	1.2	3.1	2.65	
22	〃	〃	〃	23.4	1.1	2.6	1.95	
23	〃	〃	〃	24.6	1.4	2.8	2.45	一部破損
24	〃	L—60	〃	22.9	1.1	2.1	2.0	
25	〃	〃	〃	22.9	0.8	2.5	1.15	一部破損
26	〃	L—61	〃	23.1	1.0	2.7	1.0	背文（元）一部破損
(27)	不　　明	L—60	〃				3.15	鉄　　銭


N－50Ⅳ層
1
L－47Ⅳ層
2
3
L－47Ⅳ層
4
L－47Ⅳ層
5
L－47Ⅳ層
6
L－47Ⅳ層
7
L－60Ⅳ層
8
M－61Ⅳ層
9
M－61Ⅳ層
10
M－61Ⅳ層
11
M－61Ⅳ層
12
M－61Ⅳ層
13
M－61Ⅳ層
14
L－30Ⅳ層
15
L－42Ⅳ層
16
L－34Ⅳ層
17
L－30Ⅳ層
18
L－34Ⅳ層
19
L－34Ⅳ層
20
L－33Ⅱ層
21
L－32Ⅱ層
22
L－33Ⅱ層
23
L－34Ⅳ層
0
5 cm

第10図　土器拓影図



第11図　石器実測図

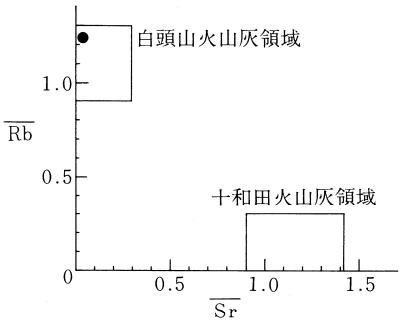


第12図　古銭拓影図

発茶沢遺跡の火山灰の蛍光Ｘ線分析

発茶沢遺跡に堆積する火山灰の蛍光Ｘ線分析の結果について報告する。

火山灰試料は十分乾燥したのち、タングステンカーバイト製乳鉢で粉砕した。粉末試料はプレスしてコイン状のペレットに作成した。このペレットにＸ線を照射し、発生する蛍光Ｘ線をエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置で測定した。定量分析には、標準試料として、岩石標準試料ＪＧ－１を使用した。分析値はＪＧ－１による標準化値で表示した。



第13図　発茶沢遺跡における火山灰のRb-Sr分布図

青森県に堆積する火山灰のうち、白頭山火山灰と十和田系火山灰の相互識別にはＲｂ－Ｓｒ分布図が有効である。分析結果を図に示す。

発茶沢遺跡に堆積する火山灰は明らかに白頭山火山灰領域に分布する。また、Ｆｅ因子でも白頭山火山灰に対応した。この結果、発茶沢遺跡の火山灰は白頭山火山灰と判定された。

（三辻利一）

ま　と　め

１．検出した遺構は、溝状ピット９基、円形ピット１基、焼土状遺構１基の総11基であった。

２．検出遺構の帰属時期については、出土遺物がなく不明である。

３．遺物についてみても、遺構と同様、ごくわずかであり、縄文時代早・後期の土器片が数十片、土師器片が数片、石器が５点、古銭が27枚出土したにすぎなかった。

４．今回調査した区域は、昭和55年度に調査した「発茶沢遺跡Ｃ地区」の遺構の在り方と、今回の遺構の検出状況からみて、集落の縁辺部に相当する地域であったと考えることができる。

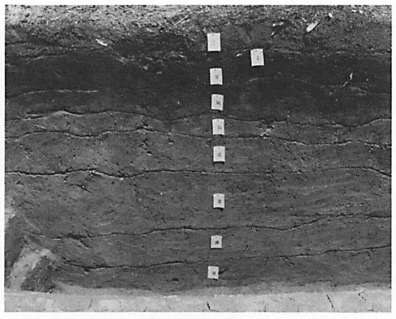
（遠藤・一条）

写 真 図 版

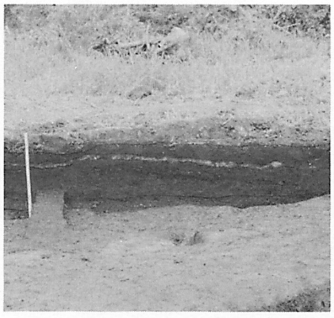
遺跡遠景
（西→東）

遺跡近景
（東→西）

作業風景

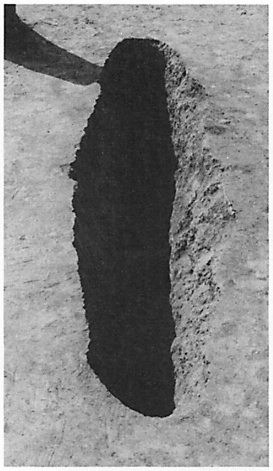


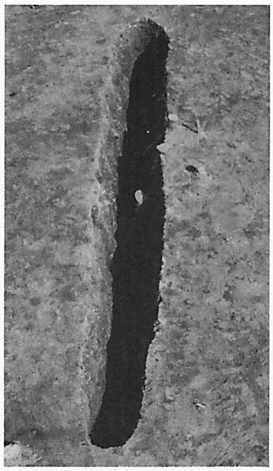
基本土層（Ｐ－56グリッド）



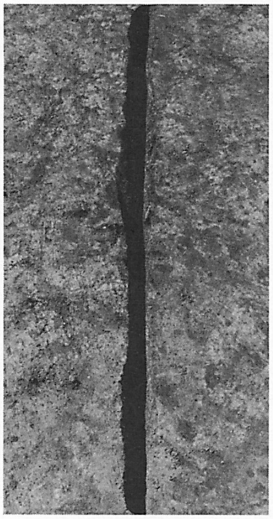
土層（白い層が火山灰）

PL 1　遺跡全景・土層

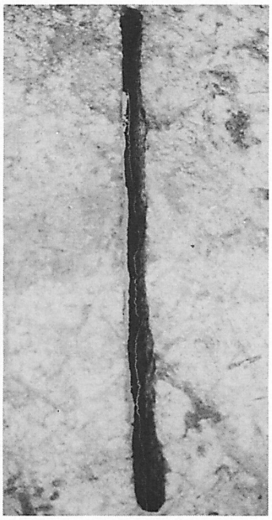

1号

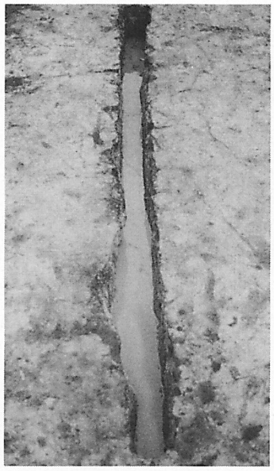

2号

3号

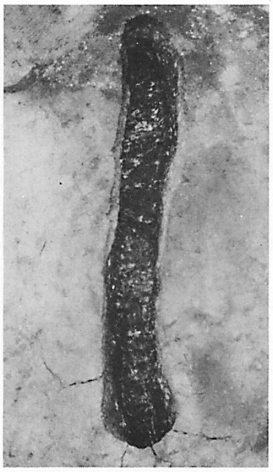

4号

5号

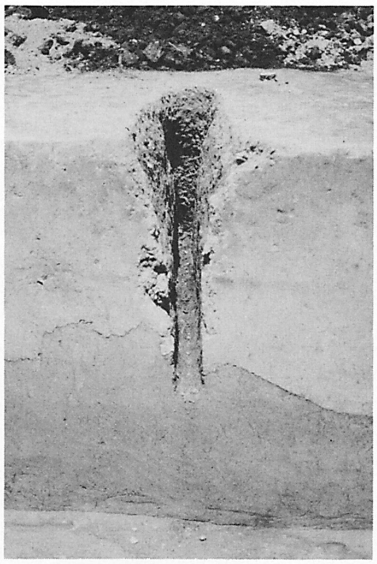

6号


7号

8号

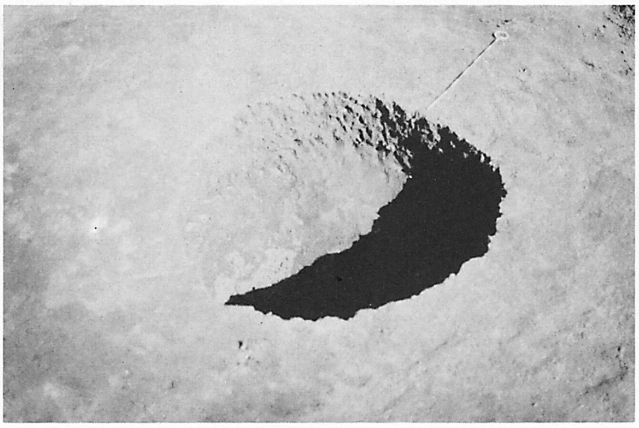

9号

PL 2　溝状ピット

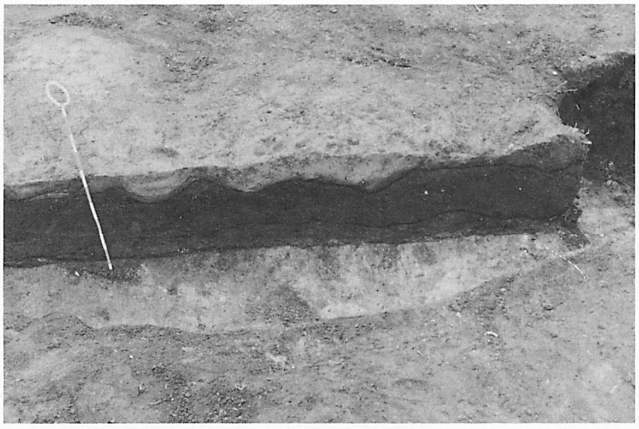


2号溝状ピット断面

5号溝状ピット断面

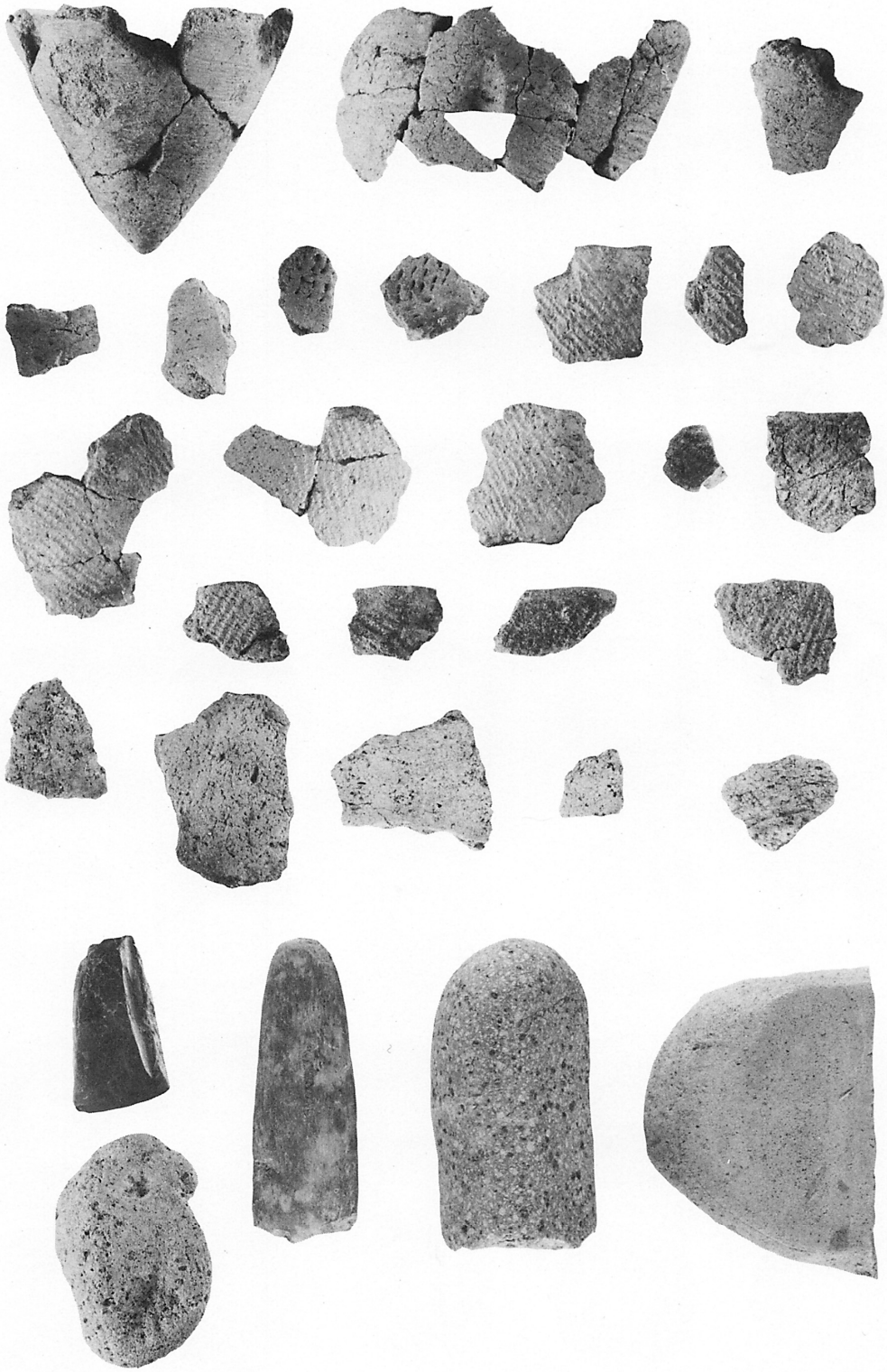


円形ピット



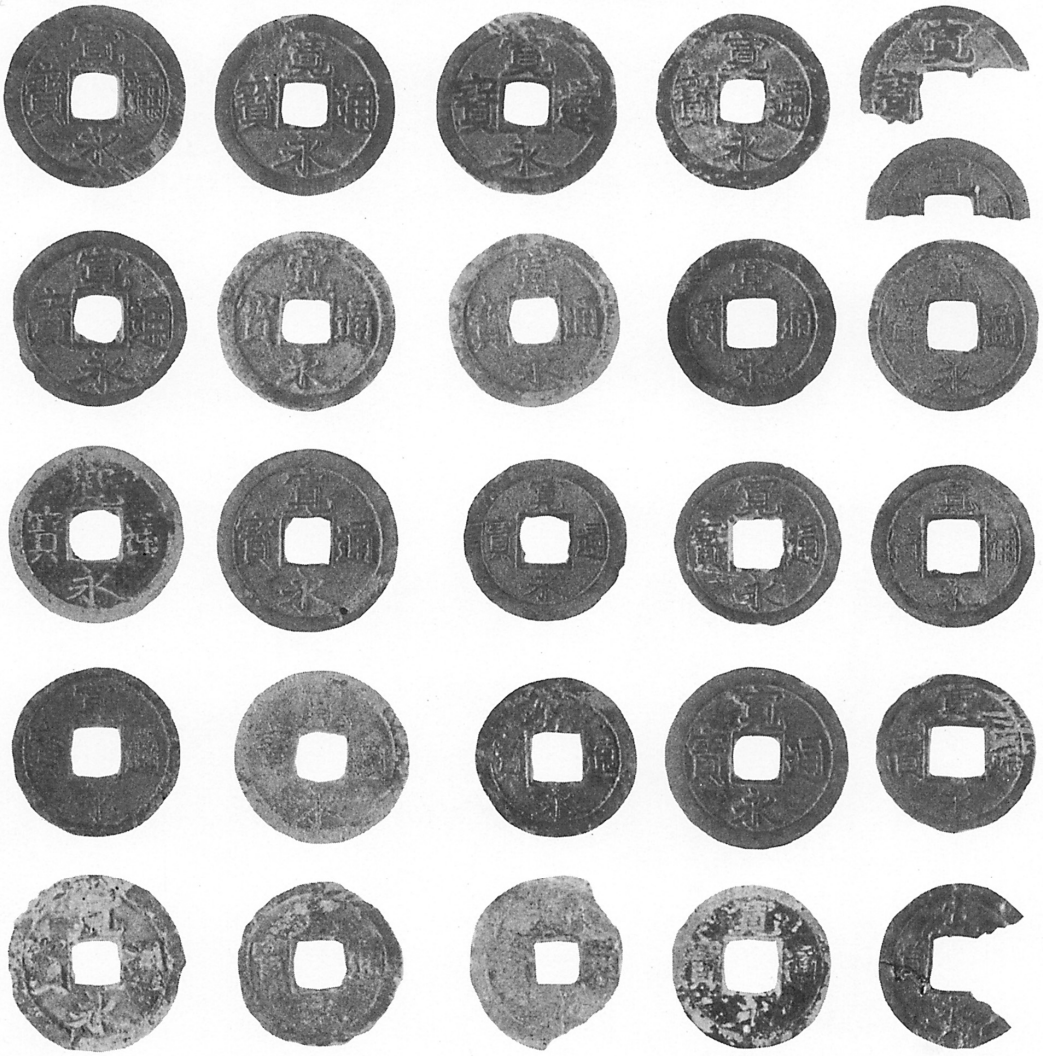
焼土状遺構

PL 3　溝状ピット・円形ピット・焼土状遺構



PL 4　出土遺物（土器・石器）

古銭出土状況



PL 5　出土遺物（古銭）

青森県埋蔵文化財調査報告書第96集

発　茶　沢　遺　跡

発　掘　調　査　報　告　書

発行年月日　昭和61年3月31日
発　　行　青　森　県　教　育　委　員　会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒030-02 青森市新城字天田内
152—15
印　刷　所　不　二　印　刷　工　業　株　式　会　社
〒030 青森市合浦一丁目10番16号
ＴＥＬ　４１—５４３９